

【一】本文について、設問に答えよ。

彼の口元をちよつと眺めたとき、私はまた何か出てくるなとすぐ感づいたのですが、それがはたしてなんの準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。①だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられたときの私を想像してみてください。②私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせるはたらきさえ、私にはなくなってしまったのです。

そのときの私は恐ろしさの塊と言いましようか、または苦しきの塊と言いましようか、なにしろ一つの塊でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに固くなったのです。幸いなことにその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐしまったと思えました。③先を越されたなと思えました。しかしその先をどうしようという分別はまるで起こりません。おそらく起こるだけの余裕がなかったのです。私は脇の下から出る気味の悪い汗がシャツにしみ通るのをじっと我慢して動かさずじまいでした。Kはその間いつものとおりに重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくつてたまりませんでした。おそらくその苦しきは、大きな広告のように、私の顔の上にはつきりした字で貼りつけられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気のつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、④自分のことに一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのです。彼の自白は⑤最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くてのろいかわりに、とても容易なことでは動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念にたえずかき乱されていきましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり⑥相手は自分より強いのだという恐怖の念がぎざし始めたのです。

Kの話がひととおり済んだとき、⑦私はなんとも言つことができませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいるほうが得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

問一 傍線部①とあるが、その驚きを最もよく表している一文を探して、初めと終わりの三字を書け。

問二 傍線部②とあるが、(1)「彼の魔法棒」、(2)「化石された」とは、何の比喩か。それぞれ十文字以内で答えなさい。

問三 傍線部③とあるが、どういうことか。簡潔に説明せよ。

問四 傍線部④とあるが、Kは「私」に対してどういう気持ちで相対していると思われるか。説明せよ。

問五 傍線部⑤とあるが、その調子を端的に表す擬態語を本文中から抜き出しなさい。

問六 傍線部⑥とは、「私」がKをどのような人物だと思っているからか。

ア 温厚な性格で義理堅い人物。

イ 強固な意志を持ち、信念を曲げない人物。

ウ 凶太い神経を持ち、打算的な人物。

エ 性急な性分で、直情径行的な人物。

問七 傍線部⑦とあるが、それはなぜか。その理由を二五字以内で答えなさい。